

第 43 回多摩川流域セミナー

～多摩川の歴史と川づくり～

～歴史に自然に川づくり、いろいろな角度から見た多摩川中流域とは？～

開催報告

1. 概要

- 日時：2015 年 1 月 18 日（日）9:00～12:30（晴天）
- 場所：聖蹟桜ヶ丘駅～大丸用水堰左岸側
- 主催：多摩川流域懇談会
- 参加人数：全 51 名（一般参加者 22 名・スタッフ 29 名）

2. プログラム

第 43 回多摩川流域セミナー 9:00～12:30

- プログラムの概要は表 1 に示す通りです。
- 大栗川合流点の野鳥観察小屋付近、大丸用水堰左岸側の 2 箇所で開催地見学を行いました。移動の途中では班ごとに説明係による見どころの説明がありました。

<見どころの説明係>

- 1 班：浅井氏（多摩市水辺の楽校）、加藤氏（府中市）、石坂氏（TB ネット）、瀬尾氏（京浜河川事務所）
- 2 班：西氏（多摩市水辺の楽校）、青木氏（府中市）、佐山氏（TB ネット）、尾崎氏（京浜河川事務所）
- 3 班：相田氏（多摩市水辺の楽校）、中村氏（多摩市）、神谷氏（TB ネット）、村田氏（京浜河川事務所）

表 1 「第 43 回多摩川流域セミナー」プログラム

項目	説明者	場所
開会挨拶	宮林 茂幸氏（多摩川流域懇談会会長）	聖蹟桜ヶ丘駅前
現地見学① 『多摩川の自然と野鳥観察』 『多摩市水辺の楽校活動紹介』	西 厚氏・浅井 民雄氏・相田 幸一氏 （多摩市水辺の楽校） 中村 泰三氏（多摩市）	大栗川合流点 野鳥観察小屋付近
現地見学② 『府中水辺の楽校活動紹介など』	加藤 哲康氏・青木 眞輝氏（府中市） 矢崎 謙太郎さん （府中水辺の楽校子ども実行委員）	大丸用水堰左岸側
現地見学③ 『多摩川の河川整備・維持管理』	瀬尾 敬介氏（京浜河川事務所）	
閉会挨拶	田上 祐二氏（京浜河川事務所副所長）	

3. 現地見学

晴天の下、聖蹟桜ヶ丘駅前に集合し、約 50 名の参加者が 3 班に分かれ、多摩川の見どころが書かれたしおりを手にしながらか約 5.5km の道のりを歩きました。途中、多摩市水辺の楽校スタッフの皆さまや府中市にサポートいただき、コガモ、カワセミ、ジョウビタキ等の野鳥を観察しました。また、川づくりや歴史、自然環境の見どころに関して、河川管理者、市民団体、流域自治体スタッフから説明があり、参加者からもたくさん質問が出されました。



見どころが掲載されたしおり



見学ルート

3.1 集合

- 9時に聖蹟桜ヶ丘駅に集合しました。
- TB ネットの石坂さんより見学ルートやスケジュールについて、京浜河川事務所の米沢課長より注意事項と配布資料について説明がありました。



プログラムの説明

開会挨拶【宮林茂幸氏（多摩川流域懇談会会長）】

- 多摩川流域セミナーは本日で第 43 回を迎えます。「川を理解する」「地域を理解する」ということについて、私たちは歴史や季節の変わり目を川から学んでいました。今後はつながりがあったが切れてしまったものを取り戻す道筋を作っていくことで「川と共存すること」が大切です。川によって畑、森、都市、海がつながっています。上流をきれいに管理していれば、川に養分が流れ出て魚も育っていきます。そして、それを私たちが「食むこと」、その循環が大切です。全ては川から始まっています。本日はどうぞ気を付けてよろしくお願いいたします。



開会挨拶

3.2 現地見学

3.2.1 野鳥観察

多摩市水辺の楽校スタッフの皆さまにサポートいただき、双眼鏡やフィールドスコープにより以下の野鳥を観察することができました。特にノスリやカワセミを初めて見た参加者からは感激の声が聞かれました。また、途中ダイサギとコサギが並んでいる様子が見られ、大きさの違いを観察できました。

<確認野鳥リスト>

カワウ、コサギ、ダイサギ、アオサギ、カルガモ、コガモ、オナガガモ、トビ、ノスリ、カワセミ、ツグミ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、ガビチョウ（鳴き声）、シジュウカラ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス（計 20 種）



コガモ



野鳥観察の様子



野鳥観察の様子

○野鳥の説明等

- 昔は現在の大栗川の崖沿いに乞田川が流れていました。大栗川の崖沿いにはアオサギの営巣地がありました。夜の鳴き声が怪獣の様に怖いため、それを知らない人から通報があったそうです。
- カワウはよく羽を広げている姿を見られると思いますが、それは羽を乾かすためです。羽を乾かさないと沈んでしまいます。
- 現在関戸橋の下では橋の架け替えに向けて、チョウゲンボウを巣箱へ移す試みが行われています。ここの巣箱はコンパネを利用していますが、千曲川ではリンゴ箱を利用しているそうです。
- ジョウビタキは羽に白い斑点があることから、「もんつきどり」とも呼ばれます。TB ネット石坂さんによると、小菅村では「だんごっしょい」（だんごを背負っているように見えるため）と呼ばれているそうです。

○質疑応答

Q：ゴイサギはこの周辺にはいないのですか。

A：数年前は大栗川と乞田川の合流点付近で子育てをしていましたが、出水の影響によって河岸が消失してしまったため、現在では生息していません。

Q：コガモとカルガモが近くにいますが、ケンカはしないのですか。縄張りはあるのですか。

A：グループは作っていますが、この周辺のグループ同士はうまく住み分けているようです。

Q：（ここで見られた）カモは何を食べているのですか。

A：主に「藻」などの植物を食べています。深く潜れないので、逆立ちをして食べます。

Q：カワウが1羽でいますが、集団と単体、どちらで行動することが多いのですか。

A：カワウは集団で行動することの方が多いです。五日市の養魚場周辺では500羽もの集団がいると聞いたことがあります。

Q：どうしたらいろいろな鳥を見つけられますか。

A：鳥がとまる場所はだいたい決まっています。それを知ることと、木の上で周りとは違うものが無いかなど注目することです。また、空を見るときには、「飛んでいるのは鳥しかない」と思ってください。

3.2.2 見どころの説明

移動の途中には、しおりに掲載されているものを中心として、イラストや写真等をパネル化したものを用いながら、以下のような河川施設や自然環境、歴史に関する説明が行われました。

- ・ 大栗川合流点



大栗川合流点は、自然を守るために「生態系保持空間」に指定されていて、たくさんの鳥や植物が見られます。また、多摩川 50 景にも選ばれています。

- ・ 多摩川の植物



多摩川には石の河原に生える貴重な植物がたくさんあります。

堤防にも生えています。これは「カワラサイコ」と言います。みなさんも探してみてください。(見つけてもそっとしておいてくださいね)

- ・ 関戸資材置場



災害時に使う資材を備蓄しています。

災害時、必要があればここから資材を持って行って、工事に使います。

- ・ 水制



写真の水制は、多摩川右岸（多摩市側）に見られる水制です。

この付近の水制は、水の勢いを弱めるためについています。

- ・ 関戸橋 関戸の渡し



昭和のはじめに関戸橋がかけられるまでは、対岸まで舟で渡っていました。

多摩川には昔、計 36 箇所の渡しがあったそうです。

- ・ 堤防の上は歩道として整備されています



府中市あたりの堤防上は「たまりバー50キロ」というウォーキングコースの一部です。たまりバー50キロは大師橋緑地から～羽村までの多摩川沿いにあります。たまりバー50キロの距離標は500mごとにあります。

- ・ 水制



多摩川左岸(府中市側)にも水制が見られました。下の部分が埋まっているので、角が生えているみたいにも見えます。

- ・ 多摩川はかつて、府中の街なかを流れていました。



多摩川の流路図(新多摩川誌より)



当日は古地図を使って説明がありました

- 湧水



河川の伏流水なのか、台地のほうから来ている水なのかははっきりしていませんが、この付近の川の中で湧水が見られます。

(当日は近づくことができませんでした)



確認箇所付近のワンド(池のようになっているところ)で小魚がたくさんはねていました。

- キロ杭(距離標)



河口からの距離をあらわすキロ杭は200mごとに立っています。

写真は多摩川左岸、34kmのキロ杭です。

- ライブカメラ



川の状態を監視しています。

ライブカメラの映像はHPでも見られます。

- 大丸用水堰



昭和の中ごろに整備された堰で、多摩川50景にも選ばれています。

周辺では府中水辺の楽校が活動を行っています。

- ・ 坂路



勾配のゆるいユニバーサル坂路です。
誰もが多摩川に親しめるようになっています。

この他にも様々な見どころがありました。

- ・ 野鳥観察小屋付近はスカイツリーのビュースポットでもあります。
なんと、都庁のタワーの間にスカイツリーが見えました。



拡大
➡



- ・ 晴天で綺麗な富士山が望めました。



- ・ 関戸橋から見える多摩川です。



- ・ とても気持ちのよい天気でした。



○質疑応答

＜報恩橋水位観測所＞

Q：水位はどのように測っているのですか。

A：いくつかの測り方がありますが、ここではラッパ型になっている水位計で水面までの反射を使って測ります。この場所では下の方に水位の目盛もありますが、現在はマイナスになっています。

Q：水位が「マイナス」ということは不思議に思います。

A：冬は1年の中で水量が少なめなので、水位が低くなっています。また、場所によっては、川底が掘れて下がることで、水位が低くなっている場所もあります。



報恩橋水位観測所

＜洪水について＞

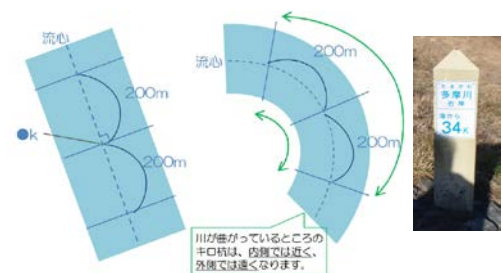
Q：洪水の際はどのくらいの高さまで水が上がるのですか。

A：洪水の時には天端から約 1.5m 下まで水が来ます。その「余裕高」として 1.5m を計画しているのです。

＜キロ杭（距離標）＞

Q：川の流れが変わってしまう中で、流心はどのように設定するのですか？

A：洪水時の流幅の中心を流心としています。



キロ杭の設置について

○感想

- ・ 多摩市側と府中市側で利用や風景の違いがよく分かります。
- ・ ただ歩くだけでなく、川や自然についていろいろな説明を聞けることでよく分かりました。
- ・ 堤防の下は初めてあるきました。

現地見学①『多摩川の自然と野鳥観察』『多摩市水辺の楽校活動紹介』

説明：西 厚氏・浅井 民雄氏・相田 幸一氏（多摩市水辺の楽校）中村 泰三氏（多摩市）

大栗川合流点周辺で見られる野鳥や植物について説明があった他、写真等を用いたパネルで多摩市水辺の楽校の活動が紹介されました。

【野鳥に関する説明】浅井氏

- この場所は野鳥観察のメッカになっています。毎週野鳥の会や水辺の楽校、探鳥会などが観察を行っています。
- 向かいの崖はゴルフ場です。下流の方は赤土の土手で、カワセミの営巣地となっています。一時期は少なくなりましたが、下水処理場の整備が進み多摩川の水がきれいになったことから、徐々に増え、今では下流の方まで生息域を広げています。
- 7～8年前はヤマセミが生息し、子育てをしていた時期があります。その頃は 100 台くらいのカメラが並びました。最終的にはオオタカに獲られてしまいました。
- この場所にはオオタカ、ハイタカ、ノスリ、チョウゲンボウなどの猛禽類がやって来ます。稲城にかけての丘陵に生息しているようです。この場所にそのような鳥が来るのは動物も昆虫もたくさんいるからだと思います。キツネやタヌキ、イタチなどもいます。
- 野鳥観察小屋周辺では、年間 100 種くらいの鳥類が確認されます。カモ類は減ってききましたが、白鳥を餌付けしているところに集中していると考えられます。
- 昨年 2 月にはコハクチョウのファミリーが 2～3 週間滞在していました。

【多摩市水辺の楽校活動紹介】西氏

- 水辺の楽校の活動の中では魚をとったりホトケドジョウなどを捕まえたりしています。基本的には記録して逃がし、外来種は処分します。
- 6 月頃に川の生きもの観察会を行います、100 名以上が参加します。
- 大栗川では、大栗橋よりも上流でイカダレースを行います。ポリタンクとコンパネを組み合わせて作るイカダには子どもが 4 人ほど乗ることができ、タイムレースを行います。
- 夏には源流サマーキャンプを行います、今年で 10 回目となります。多摩川 138km の始まりである水干に行ったり、農業体験をやったりしています。
- E ボートの体験イベントでは NPO の協力を得ながら実施し、参加者は 2 回で 200 名にのびります。
- このように多摩川、大栗川、乞田川の 3 本の河川を使って子どもたちと一緒に自然観察を行っています。



説明を聞く参加者



説明の様子(浅井氏)

【植物に関する説明】 相田氏

- 大栗川合流点は生態系保持空間（⑧空間）に指定されています。生物が豊かで自然を守る空間に設定されています。
- この周辺では、カワラサイコやカワラヨモギなど、名前に「カワラ」とつく貴重な植物がたくさん確認できます。これらは石の河原に生育する植物です。
- 中洲では木立が増えたり、湿原になったりを繰り返しています。また、中洲にはキツネやタヌキなどの動物もたくさん暮らしています。
- 今見ていただくと、大きな木が目に残まると思いますが、その多くはニセアカシア（ハリエンジュ）という外来種です。その他ヤナギ類もあり、そういった木は鳥が利用しています。
- 大栗川と多摩川が合流する三角形になっている部分は余りきれいには見えないと思いますが、これは特定外来種のアレチウリによる影響です。洪水が起きると無くなりますが、洪水がないとヨシ原を覆い尽くしてしまいます。
- このように、河原では自然の流れの中でいろいろなことが起こっています。また、河原の植物を観察すると、畑の種が流れているため野菜が確認されることもあります。特に春先から夏にかけて河原は変化に富んでいます。

【多摩市の協働の取組みについて】 中村氏

- 多摩市では水辺の楽校や市民環境会議など様々な団体と協働していろいろな活動や生きものの調査などを行っています。



説明の様子（西氏）



説明の様子（相田氏）

現地見学②『府中水辺の楽校活動紹介など』

説明：加藤 哲康氏・青木 眞輝氏（府中市）

矢崎 謙太郎さん（府中水辺の楽校子ども実行委員）

活動の様子の写真紹介と合わせて、府中水辺の楽校の活動紹介やレンリソウ保護の説明がありました。

- 水辺の楽校は全国に約 300 校あり、多摩川流域では、そのうち 20 校が活動を行っています。多摩市水辺の楽校と同様、府中水辺の楽校でも石ころウォッチングや野鳥観察会、植物観察などを行っています。
- 府中水辺の楽校の活動ではありませんが、市民団体が今回の見学ルートでご覧になったレンリソウという絶滅危惧種の植物を保護して残していく取り組みを行っています。なお、三多摩地域のうち府中市が含まれる多摩川より北側の「北多摩」地域では特に減少しています。南多摩地域では群生しているところがあるそうです。
- 府中水辺の楽校では 6 月から 1 月に様々なイベントを行っています。また、活動が始める前にはとどろき水辺の楽校の指導の下、指導者講習会を実施し、スローロープの投げ方などを学んでいます。
- 子ども実行委員会では活動発表会を行っています。今年は総合学習授業に関する発表をする子どもたちと一緒に、2 月 15 日に府中市郷土の森博物館で行います。
- 来年で活動は 10 年目となります。これまでの参加者は、平成 25 年度に延べ 1 万人を超えました。
- 現代の子どもたちのお父さんお母さんは川遊びをしていない世代ですが、一緒にガサガサなどを行い、子どもより夢中になってしまう人も見られます。リピーターも増えています。
- これからも環境に興味を持っていただくイベントを実施して、残していくべきものを考えていきたいです。
- 最後に、府中水辺の楽校の活動に全て参加している、子ども実行委員の矢崎さんが今回多摩川流域セミナーに参加してくれているので紹介します。次代のトップリーダーです。
- 紹介の後、矢崎さんより「今日はありがとうございました」と挨拶がありました。



説明の様子（府中市）



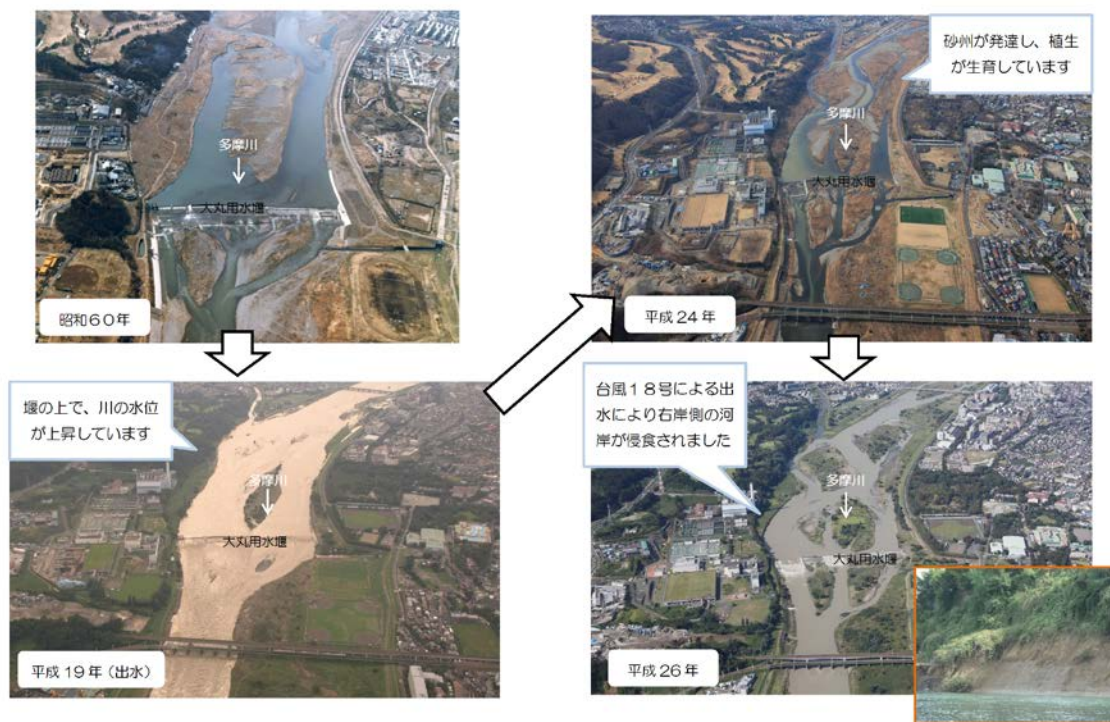
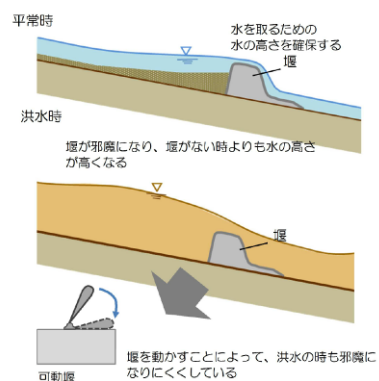
矢崎さん（府中水辺の楽校子ども実行委員）の挨拶

3.2.3 現地見学③『多摩川の河川整備・維持管理』

説明：瀬尾 敬介氏（京浜河川事務所）

航空写真やイラストを用いて、堰の役割や課題、河川管理について説明がありました。

- 堰は水をとって使うために設けられています。一方で堰が設置されることで洪水時に上流の水位が上昇しやすくなります。一部を可動堰とすることで、出水時に堰を倒して洪水時に邪魔にならないように調整しています。
- また、堰の上流には土砂も溜まります。昭和 60 年と平成 24 年の航空写真を比較すると、平成 24 年は堰の上流側に土砂が堆積し、木が生えているのが分かります。
- 大丸用水堰は、堰と堰の上にたまっている土砂が影響して、洪水の時には上流側で水位があがってしまい、大きな洪水を安全に流すことはできません。
- 土砂が溜まり、砂州に木が生えたため、小さな洪水が河岸に水がぶつかるようになったため、平成 26 年の台風 18 号による出水では、それほど大きな出水ではありませんでしたが河岸が崩れてしまいました。そのため、応急的な対策を行いました。今後、本格的な対策を行っていく必要があります。



空中写真（大丸用水堰周辺）の経年変化

3.3 閉会挨拶【田上 祐二氏（京浜河川事務所副所長）】

- 多摩川流域懇談会では毎年 2 回程度、多摩川流域セミナーを行っています。今日のように現地見学を行ったり、学生に発表してもらったりしています。行政、市民団体、学識者、企業が一体となって多摩川をいい川にしていくことを考えながらイベントを開催しています。
- 親しまれる多摩川、いい川をつくっていきたいと思っています。多摩川では水辺の楽校などがたくさんあることも魅力です。午後は多摩川流域歴史セミナーが開催されます。こちらにも参加いただければと思います。

以上



説明の様子（瀬尾氏）



閉会挨拶